

〈特集〉 マレー世界のなかのマダガスカル

編者のことば

高 谷 好 一*

ここに集録するものは『マレー型農耕文化の系譜——内発的展開と外文明からの変容』（昭和61年度文部省科学研究費海外学術調査）という標題のもとに行なったマダガスカルでの現地調査の研究成果の一部である。

「マレー型農耕文化」という言葉はまだ市民権をえたものではない。そのこともあってこの言葉にはまだ定着した定義もない。しかし、東南アジアで長年調査を続けてきた私達は、この言葉で表されるような農耕の一類型を設定してもよいのではないかと最近考えるようになった。その理由を説明し、できることならその性格を明確にしようというのが今回の調査の目的であった。

すでに今までから穀類文化、根栽文化というような概念は存在している。ユーラシア大陸には犁耕をともなう穀作文化圏というのがあり、熱帯多雨林、特にアジアの熱帯多雨林島嶼の東部には犁耕を欠くイモ作文化圏があるというのはよく知られた事実である。最近の研究では、前者は少なくとも5,000年以上の歴史を持ち、後者も9,000年に達する歴史を持つということも判ってきている。どうやら、両者はこの長い歴史を通じてお互いの文化を深化させてきたらしい。

ところで、私達は近頃、この両者の間にいわばその中間的な農耕文化が極めて広く拡が

っており、したがってそれを別の一群として取り扱った方が便利だと考えるに到ったのである。それは端的に言えば、犁を欠く穀作農耕文化ということである。穀類を持つという意味において穀類文化に入るが、犁を欠いているという意味ではむしろ根栽文化に共通するところが多い。この中間型の農耕をここでは「マレー型農耕」といっているのである。

調査の主目的はこのマレー型農耕を系譜的に解明しようということである。この目的遂行のために私達は次の三つの調査ステップを考えた。第一は、このマレー型農耕の中核部と考えられる所でその性格を精査することである。第二は、この農耕文化圏の地理的広がり確定であり、第三は周辺地域における変容と、特に他農耕文化との関係の解明である。第一の点に関しては、すでにある程度の資料が手許にある。それで、今回は特に第二、第三の点に精力を集中すべく調査を設計した。

正確にいうと、私達の申請した計画では調査は2年度にわたることになっている。61年度のマダガスカル調査と63年度の東インドネシア・メラネシア調査である。前者はマレー型農耕文化圏の西端に位置し、そこでは大陸文化との接触が期待できる。後者は東端に当たり根栽文化との重層関係が見られるはずである。ここに報告することは、こういう意図をもって行われたマダガスカル分の調査の結

* 京都大学東南アジア研究センター

果である。

集録したものは次の4論文である。

古川久雄の「マダガスカル乾燥地帯の土地利用」はマレー型農耕の本質、特にその系譜を考えようとする時、どうしても目を離すことのできない大陸の犁耕穀作文化の展開に注目している。マダガスカルの西半分は乾燥の卓越する草原地帯であるが、そこでの牧畜と稲作の絡み合いに焦点をあててこのことを論じている。同氏にいわせると、いわゆるマレー型稲作の基本要素の一つである蹄耕はメソポタミアに起源しているというのである。

田中耕司の「マダガスカルのイネと稲作」は稲品種と稲作技術を分析の武器に用い、その視点からすると、マダガスカルには二つの系統があると指摘している。一つはいわゆるマレー系とでも呼びうるものであり、そこでは大粒稲が斜面での焼畑稲作や湿地での蹄耕稲作として作られている。今一つはインド系とでも呼べるもので、長粒稲が水田で直播栽培されている。後者には牛蹄脱穀が用いられている。著者は古くは前者が優勢であったが、最近では後者のインド系稲作が急激な拡散をしているとしている。

深澤秀夫の「稲作を生きる、稲と稲作の実践と戦略」は、Tsimihety族の間でみられる稲作を中心にした生活とその社会を記載、論述している。Tsimihety族の専門家である著者は、マレーとの比較は直接的なかたちでは行なっていない。しかし、論述自体がすでに比較を喚起するようなものである。明らかにマレー世界を通過して来たであろう稲作民がアフリカに近いこのマレー圏の西縁でどういう変容をとげているのかを窺い知る上で役立つ多くの一次資料を提供している。

前田成文「ベフディ——ベツィミサラカ族とシハナカ族の狭間で」は、稲作民ベフディを事例として、そのエスニシティといわれるものが何であるかを論じている。マレーの農

民は絶えざる流動と混合を繰り返すことが一つの大きな特徴であるらしいのだが、本論文はその点を掘り下げている。私達の「マレー型農耕文化」の研究は単に農耕技術の側面だけでなく、その社会の仕組みや価値観まで考えあわせたいと思っているが、本論文はそうした局面を扱ったものである。

以上が個別論文である。最後に論文とは別に座談会記録が、「マダガスカルの農耕——そのマレー的要素について」として添付してある。ここでは研究班の全員が集まって、マダガスカル農業の全体像はどのようにとらえたらよいのかを討議している。研究者の間で鮮明な意見の対立の見られる点も多々あった。こうして完全な意見の一致には到底いたっていないのではあるが、収穫もあった。それは、マダガスカルを東南アジアと比較することによって、いわゆるマレー型農耕文化圏の位置や性格が、おぼろげではあるが地球的規模でおさえられたことである。もっともしかし、このことは現時点ではあまり先走っていきべきではない。本調査は本日現在、まだ進行中だからである。何人かのメンバーは、63年秋の現時点で東インドネシアとメラネシアの調査に入っている。これらの調査が完了した時点で、この問題はもう一度、議論しなければならない。

最後になったが、マダガスカル調査に際して、いろいろお世話になった方々に、この紙面を借りてお礼を申し述べておきたい。出入国に関しては在日マダガスカル大使館、在マダガスカル日本大使館にお世話になった。マダガスカルに着いてからは Ministère de la Recherche Scientifique et Technologique pour le Développement と FOFIFA (Centre National de la Recherche Appliquée au Développement Rural) にお世話になった。Rakotomalala 氏と Rabarijoelina Armand 氏は調査の全期間、

私達と行動を共にしてくれた共同研究者である。
った。これらの方々には全員深く感謝してい

(1988年9月)

Madagascar in the Malay World Editor's Note

Yoshikazu TAKAYA*

This special issue concerns a project entitled "Studies on Traditional Rice Culture in Madagascar in Relation to 'Malay' Agriculture," which was conducted with the support of a grant from the Ministry of Education of Japan.

Four papers and the record of a panel discussion are included here. Furukawa's paper, which deals with the dry zone of Madagascar, suggests the possible influence of Mesopotamian agriculture over the area in ancient times. Tanaka's paper shows two routes by which rice and rice culture were introduced into Madagascar: one from Southeast Asia and the other from India. Fukazawa's paper describes the tightly knit relation between man, rice and cattle in Tsimihety society. Maeda's paper, through an analysis of Befody society, points

out the flexible nature of so-called ethnicity. A panel discussion aimed at building an overall view of 'Malay' agriculture is recorded under the title "Madagascar and the Malay World."

It is our pleasant duty to thank for their various forms of assistance: Ministère de la Recherche Scientifique et Technologique pour le Développement, FOFIFA (Centre National de la Recherche Appliquée au Développement Rural), the Embassy of Madagascar in Tokyo, and the Embassy of Japan in Antananarivo. Special thanks must be expressed to Mr. Rakotomalala and Mr. Rabarijoelina Armand, who cooperated with us as counterparts during the entire period of our field study.

(September 1988)

* The Center for Southeast Asian Studies,
Kyoto University